

修士学位請求論文要旨

『COM』読者投稿欄「ぐら・こんロビー」の研究 ——〈手塚神話〉と「マンガ世代」——

明治大学国際日本学研究科国際日本学専攻

文化・思想領域（4911226002）

小島淳之介

本論文は 1967 年～1973 年にかけて出版された、虫プロ商事より刊行されたマンガ雑誌『COM』を研究対象とし、『COM』の読者投稿欄「ぐら・こんロビー」を分析することで、手塚治虫を特権化する評価と「マンガ世代」の語りのスタイルの成立過程の一側面を明らかにしようとするものである。

〈マンガの神様〉と呼称するような手塚への特権的な評価、「映画的手法」と「ストーリーマンガ」を理由として手塚治虫が戦後マンガの起源とされること、それらは、手塚の影響を受けた「マンガ世代」による語りがマンガ言説の中で大きな位置を占めたこととも絡み合った問題である。本稿では、そのような複合的な問題が絡み合った手塚評価を、〈手塚神話〉と呼称した。

〈手塚神話〉の存在は、他の観点からのマンガ評価の観点や、マンガ表現史を覆い隠す側面があり、今日まで問題視されているものである。〈手塚神話〉は 1970 年前後には自明のものとなりつつあったと言われている。だからこそ、その時期に刊行され、手塚治虫と結びつけて語られることの多い『COM』を見ていくことで、今日まで続く〈手塚神話〉の形成過程の重要な一端が明らかになるのではないかと考える。

また、〈手塚神話〉を自明視するような語りをを行った「マンガ世代」は『COM』について言及することも多い。先行世代の言説を抑圧するような「ぼくら語り」やマンガの表現に着目した「マンガ表現論」といった「マンガ世代」の論者たちの語りには、〈手塚神話〉を強化する側面があったと言える。それゆえ、彼らがその活動初期に通った『COM』の言説の中には、後続の彼等の語りとの連続性を見出せるのではないだろうか。

本論文はそのような問題意識に基づき、〈手塚神話〉と「マンガ世代」を切り口として、『COM』「ぐら・こんロビー」上の言説全体を調査した。

第 1 章では、議論の前提として、雑誌『COM』について、手塚治虫をめぐる語りの変遷、そしてマンガ研究領域において手塚の特権的評価が問題化されてきている状況、手塚の特権的評価を自明視した「マンガ世代」の存在の問題を先行研究に基づいて整理した。

第 2 章では、『COM』誌上で手塚が繰り広げた論争から、好戦的な手塚の語り口を確認し、そのような語り口が理想的なマンガ批評のあり方だとされる向きが『COM』読者に存在したことを指摘した。また、社会運動の影響が、投稿欄の語りに影響した事例を示し、当時の読者に、手塚から受け継ぐ側面と手塚から受け継ぐだけではない側面が存在したことを述べた。

第 3 章では、「まんがエリート」という雑誌の初期にあった副題が理想化され、また手塚が抱いていた「子どもまんが」という従来の枠組みが読者に影響し、子ども向けであるか否かでマンガを評価する語りが存在したことを確認した。そのような従来のマンガ受容の

枠組みにとどまる見方や、「まんがエリート」という言葉を読者も用い、後続世代を意識するような啓蒙的な傾向が『COM』投稿者にあったことを確認した。

第4章では、手塚治虫について語る「ぐら・こんロビー」の投稿を抜き出し、『COM』誌上における手塚の過去作の紹介が、プロパガンダ的意味合いを持って読者に影響し、手塚の過去作が押さえるべきものとして、「ぐら・こんロビー」上で掲載を要求されていたことを確認した。また、そこでの読者の手塚受容に、自分たちの幼少期の原体験を重ね合わせる見方があったことを指摘した。

第5章では、「ストーリー」という語を用いて語られている読者投稿を集め、『COM』「ぐら・こんロビー」上において、手塚を「ストーリー」という観点で評価する見方が多数見られ、また手塚以外の作家や作品に関しても「ストーリー」という観点で評価する姿勢が存在していたことを確認した。

また、ストーリーマンガの起源として手塚を捉える認識の事例を挙げ、ストーリーマンガ起源説に関しては、その認識や意見が広く見受けられるわけではないものの、「ストーリー」という観点が広く『COM』読者・「ぐら・こんロビー」投稿者に普及し、手塚語りやマンガ評価においてその観点が用いられていることがわかった。

第6章では、まず手塚を「映画」「映画的手法」と結びつけて語る投稿がほとんど存在しないことを確認した。その上で、マンガ表現へ注目しようとする投稿を抜き出し、「ストーリー」という観点から離れ、それとは別の観点、表現へ着目しようとする語りを確認した。また、その「ストーリー」か、表現かという評価軸をめぐるやりとりに、佐々木マキへの言及が媒介項として継続的に用いられていたことも確認した。

第7章では、「少女まんが」に着目しようとする意見が1971年に投稿欄上に現れてきたことに注目し、語るべきものとして、「少女まんが」を捉え直す試みの存在を指摘した。

第8章では、「マンガ世代」がどのように集団化していき、同人誌活動に関わっていったかの過程に着目した。『COM』の編集方針の変化もあり、投稿欄が混乱していく過程、またそこでは前号で出たトピックが連鎖的に引かれてやりとりがなされていく言説の流れがあった。また、特に「迷宮」同人となる「亜庭じゅん」の投稿は、「少女まんが」へ着目すべきとした「たむろ未知」の問題提起の延長にある語りであることを、そこに至るまでの経緯から明らかにした。「亜庭じゅん」の意見がもたらした更なる反響と、混乱の中で『COM』の創刊時の言葉を引用し、初期の『COM』や手塚の言葉に回帰しようとする言説が見られることを示した。

「ぐら・こん」上の編集者の意見を含めた応酬からは、論点を見失った論争の形態が見てとれる。そこには、編集者たちが投稿欄を重視し、読者による雑誌の方針をメタ化する

語りに振り回され、雑誌の編集方針までも見失っているという、更なる混乱状況が見て取れる。また、そのような投稿欄上の混乱状況を引き起こした、論争を招くような投稿者たちの語りに、手塚の語り口と共通するものがあることを指摘した。

『COM』が当時のマンガ読者にとって孤独から誰かと出会うきっかけになっていたこと、世代による『COM』の受け取り方の違いも言説を引いて確認した。また、「ぐら・こん」誌面で名前を追うことで活動の経緯を追っていくことが可能な事例があったことに着目し、『COM』読者投稿欄が複数の情報発信主体が入り混じる SNS のような交錯する交流空間になっていたであろうことも指摘した。

今回の論文は、「ぐら・こんロビー」に見られる投稿者たちの意見を、特徴ごとに分けて、列挙し、そこで行われていたやりとりの経緯を解きほぐして、〈手塚神話〉につながる評価の切り口や、語りのスタイルを見出そうとしたものであったが、あくまで投稿欄を中心とした分析にとどまっている。今後の展望として、『COM』内の他の欄、特にマンガ評論を担った言説との関係を明らかにすることで、「マンガ世代」が受けたであろう先行世代からの影響や、当時に見られる〈手塚神話〉生成過程の細かな流れが、より明確になるのではないかと考える。また、先行世代からの影響関係に加えて、『COM』以後の「迷宮」の著述活動を追うことで、『COM』がもたらした後続の「マンガ世代」への言説的影響も明らかにできると考えられる。